

札幌遠友夜学校と新渡戸稲造

- 新渡戸稲造からの学び -

年藤 香苗

はじめに

新渡戸稲造は、「世の人々のため是非とも学校を創設したい(1)」という思いから、1894(明治 27)年、現在の札幌市中央区にある勤労青少年ホームの土地に遠友夜学校という夜間学校を設立した。この学校は、札幌農学校(現・北海道大学)の学生たちの無料奉仕と、札幌の篤志家たちによる寄付金などによって貧困のために学校に通うことのできない子どもたちおよび晩学者に対して無料で教育を行うことを目的として、1944(昭和 19)年まで維持された社会事業であり教育機関であった。

この遠友夜学校を研究テーマに設定した動機は、今後「社会福祉の従事者」となる筆者自身が、「どのような思いで福祉に携わっていくのか」という疑問を生じたことにある。そこで、筆者自身の故郷の札幌でもっとも古い社会事業である遠友夜学校がいかにして 50 年間維持されてきたのかに関心を持ち、携わってきた人々の思いやこの社会事業の歩みを辿ることが疑問への解決の近道なのではないかと考え、テーマとして選択した。

現代では、「学力重視」の教育が行われている一方で、家庭が貧困のために、勤労をしながら勉学に励む子どもや、勉学を諦めざるを得ない子どもがいる。遠友夜学校の歩みから現代の貧困と教育について考察することがこの研究の目的である。

第 1 章 教育者としての新渡戸稲造

遠友夜学校の設立者である新渡戸稲造は、日本における農政学論や植民地政策論の先駆者であり、国際連盟事務次長を務め世界の平和のために活躍する等の業績で知られている。さらに、多くの生徒や庶民に対する教育者としても評価されている人物でもある。彼は 1891(明治 24)年に札幌農学校教授に着任、同年札幌に北鳴中学校を設立、1894(明治 27)年に遠友夜学校の設立、1903(明治 36)年に第一高等学校校長に就任、1910(明治 43)年には、実業界之社の顧問となって毎号で勤労青年の為に精神の修養のための記事を掲載、『実業之日本』『婦人画報』『人生読本』等も執筆して一般庶民のへの啓蒙活動、1918(大正 7)

年設立の東京女子大学の初代学長に就任と、生涯にわたって教育に携わった。彼の教育精神は人格形成にあり、倫理学や修身講話等を通して、生徒たちに疑問を持たせて考える力を身につけさせることを大切にした。ここで、第一高等学校の生徒であった山田幸三郎氏による新渡戸稲造の教育への姿勢と生徒への愛情を表すエピソードを挙げたい。「…先生が生徒との面会日のために一高の脇にわざわざ一戸を常設的に借りて(?)たしか御令妹を留守番として住まわせられた事、(中略)先生は毎週一回二時間の面会を定めて生徒は誰彼の別なく自由に心置きなく訪ねて、日頃胸に抱いている実際生活上の疑問や、時には煩悶なども率直にぶちまけたり訴えるなどして指導や解決を受けられるようにと心掛けられた訳である。“対話”がそのまま妥当する対話教育なのであって、個人的接触なしに生徒の悩みや要望を理解することは不可能であり、この愛労を惜しんでいて生徒各自を願わしい人間像に育成しようと欲するのは、木によって魚を求めるの愚に他ならぬ。この高貴なる教育目的を達成する為に先生はその都度押しかけて来る数十名の生徒に茶菓をたっぷり出して自身も盛んにパクついて見せ乍ら打ちとけて気軽にユーモラスな座談をなしつつ楽しげに快談された。(2)」

第2章 札幌遠友夜学校の設立

1894(明治27)年、遠友夜学校の前身である豊平日曜学校が廃止されそうであることを新渡戸稲造は知り、アメリカの一婦人の浄財を用い、遠友夜会を組織し、貧困の為に学校に通うことのできない子どもと晩学者の為に普通教育を授けることを目的として遠友夜学校がはじめられた。遠友夜学校という名称は孔子の論語である「有朋自遠方来不亦楽乎」に由来し、「この句の意味は、国も名もわからない人、どこの人ともいわれぬ人がやって来ても、会って話してみると何となくわかる。そのような人は名を知らず国を知らずとも心と心とが合えばこれすなわち友達である。年齢が違っても、位置が違っても、一人は高い役人でも、一人は偉い学者でも、金持ちでも、それは大したことはない。相会って金持ちだとして威張らぬ。何となく気持ちがいい。こういう人と会うとうれしい。人間の楽しみは何といっても気の合う人に会うことである。(中略) この学校を始めるに当たり先生を頼んだ。学問のできる人のみを頼んだのではない。友達になれる一遠友になれる人、子供をかわいがる人、畢竟人と会って明るい気持ちで親切にしてくれる人を頼んだ。(3)」と新渡戸稲造は語る。

第3章 遠友夜学校に関わってきた人々

学生時代に新渡戸稲造に多くの世話をしてもらい、かつて遠友夜学校の教師を務めていた有島武郎が、親友である足助素一氏に懇願されて遠友夜学校の代表となり 1915(大正 4)年 3 月末まで活躍した。彼のヒューマニズムによる人間育成への努力のためか、この頃から遠友夜学校の雑誌には文芸的なテーマが多く見られるようになっている。彼は、新渡戸稲造から薫陶を受けた「遠友夜学校」の熱心な教師として情熱を注いだ 1898(明治 31)年の 21 歳の時に、遠友夜学校の校歌の作詞を行っている。歌詞の 5 番では「正義と善とを身にささげ 欲をば捨てて一すぢに 行くべき路を勇ましく 真心のままに進みなば～」と、9 番では「衣もやがて破るべし ゑひぬる程もつかの間よ 朽ちせでやまじ家倉も 唯我心かはらめや～」と綴られている。歌詞からは苦勞を抱えながら夜学校への希望の思いを持つ生徒たちの心を描き、そして勤勞しながら勉学に励む生徒たちを励ましているように感じられる。彼は 1914(大正 3)年末、北大を辞して帰京するが、その後も遠友夜学校への寄付を行い続けた。

理事として活躍した三島常盤氏は、遠友夜学校に 16 年間尽くした。彼は、写真業界の発展に尽くした人物だが、それだけではなく社会事業にも携わった。クリスチャンの彼は、内村鑑三や新渡戸稲造の影響を受け、戦争孤児の引き取りのために 1906(明治 39)年には札幌育児園を創設している。『札幌市社会事業の歩み』では、社会事業に参画した実業界のボランティアの項で三島氏の功績をたたえ、「名利を求めず資材につくされた常盤氏の努力は、社会事業の遺産としても高く評価し、それをうけつがなければならない(4)」と書かれている。

第4章 新渡戸稲造の訪問と死

1931(昭和 6)年、新渡戸稲造は遠友夜学校を訪問した。その際、「学問より実行」という文字を書き記し、教師や生徒たちにこう語っている。「世の中は美しい。自分一個のためだけ考えたのでは世の中は存在しない。人のことを思えばこそ楽しい。だからこれから多くの世話をして下さる人々のことを考え、親たちのことを考え、すなわち遠友の意味を考え、若いうちにでも、自分のできることで人のためになることなら何でもする。そして学校を出てからどうすれば世のため人のためになるかを考え、勉強して下さい。唯本を読み、算術することだけが学校での仕事と思わず、人格を養い、明るい気分で、世の中の人のためになるように心がけることも大切な教育なのです。(5)」この時、教師や生徒たちは強い感銘を受けている。この訪問の 2 年後の 1933(昭和 8)年に、新渡戸稲造は客死した。夜学校

の校長としては萬里子夫人が校長として就任したが、1938(昭和 13)年 9 月に夫人が亡くなり、半澤洵が閉校まで校長を務めた。

おわりに

遠友夜学校の 50 年の歩みの特徴としては、①遠友夜学校には新渡戸稲造の人格形成の視点の教育思想に根ざし、彼の教育思想を継承した多くの札幌農学校生の無料奉仕によって教育が行われていたこと、②教師と生徒が共感し合い学び合っていたこと、③札幌農学校生やその教師のみならず札幌在住の篤志家の寄付等によって経営が支えられていたこと、④時代の変遷とともに各時代で求められるものへと形態を変えながら、生徒たちへの教育が行われてきたことが挙げられる。

現代に帰すると、教育基本法によって義務教育制度が確立し、また奨学金制度の整備や、定時制や通信制の課程がつくられ、貧困を抱えている子どもが勉学を学ぶことができる体制は整えられたように見える。しかし、貧困が理由で勉学を十分に学ぶことができていない現状は未だにある。塾に通うことができず、競争激化のために勉強から振り落とされる、家庭にお金がないため受けたい高校教育を断念し勤労をしながら勉学に励もうとする、就学のためのお金を工面できずに勉学を諦めるといった問題を抱える子どもたちがいる。彼らの親からは、「学問が大切であることは承知しているが、生きていて初めて教育が必要なのであって、生き死にの瀬戸際にいる今は、生きるためにこの子の手が必要なんです(6)」という声も発せられている。親が貧困のために子どもの教育機会が失われ、子ども自身が持っている可能性が小さくなり、次世代にも貧困が続いていく貧困の再生産が起こる。このことこそ、現代の教育と貧困の重要な問題であると筆者は考える。貧困の問題を解決することは簡単なことではないが、貧困の問題を抱える子どもたちに対して、自ら考える力を伸ばし持っている可能性を引き出すことを目指した教育が必要である。そしてそれを実現するためには、子どもを育む教育の場をしっかりと保障することと、子どもの周りに存在するすべての人と子どもとの人間的な関わりこそ、教育に必要であると考え。その点において新渡戸稲造の「人格の形成」という教育思想と、それを引き継いで行われてきた遠友夜学校の実践とその 50 年の歩みは、現代の教育に問うものが多くあるであろう。

国の保障が行き届かない教育の部分を、多くの関係者たちの「貧困を抱えながら勉学に励もうとする子どもたちへの愛情や関心」と「教育事業への絶え間ない努力の継承」によって行われてきた遠友夜学校という社会事業の意義は大きい。筆者が遠友夜学校の歩みから得ることができたことは、「社会で共に生きていくための人と人とのつながり」である。

制度や政策などが整ってきたとしてもそこからはみ出てしまう対象者がいる限り、社会福祉の必要性は限りなく存在し、その対象者のために実践をし続けていくことが「社会福祉の従事者」として目指すべきところではないかと考える。今回の研究を通して得たことをさらに深めて今後の研究の課題としたい。

引用文献

- (1)鳥居清治訳注『新渡戸稲造の手紙』1885年11月13日 p,66
- (2)田中耕太郎「教育者としての新渡戸稲造」『新渡戸稲造全集別巻2』p,146
- (3)『思い出の遠友夜学校』札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編、北海道新聞社、p,54
- (4)「社会事業に参画した実業界のボランティア」『札幌市社会事業のおいたち』札幌市、p,291
- (5)『思い出の遠友夜学校』札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編、p,55
- (6)鈴木敏則「競争と選別でない一人ひとりを大切にする社会を」『高校のひろば59』p,38~39

参考文献

- ・蝦名賢造『札幌農学校 日本近代精神の源流』新評論、1991年
- ・『さっぽろ文庫34 新渡戸稲造』札幌市教育委員会編、1985年
- ・『新渡戸稲造全集 別巻2』新渡戸稲造全集編集委員会、2001年
- ・『思い出の遠友夜学校』北海道新聞社、2006年
- ・『さっぽろ文庫18 遠友夜学校』札幌市教育委員会編、北海道新聞社、1981年
- ・『郷土史豊平地区の140年 1857~1997』豊平地区郷土史発行委員会、1997年
- ・『札幌遠友夜学校資料集』札幌遠友夜学校創立百年記念事業会、1995年
- ・山田昭夫「有島武郎と札幌遠友夜学校―新資料による雑考―」『有島武郎・姿勢と軌跡』、右文書院、1973年
- ・湯澤直美他『子どもの貧困白書』明石書店、2009年
- ・山野良一『子どもの最貧国・日本―学力・心身・社会におよぶ諸影響』光文社、2008年